

発表題目 現象的意識の存在論的意味

八木 厚夫 (Yagi Atsuo)

エッセイスト

要旨

神経科学や認知科学、人工知能 (AI) 技術が急速に進展しつつある現代においても「物質に過ぎない脳と身体システムに意識が宿るとはどのようなことか」という問には諸説がある。前回の第 51 回大会では「情報様相と現象的意識」という題目で、意識の生起モデルを提案した。このモデルは、認識主体が自ら形成し消費 (利用) する志向的情報 (intentional information) の表現形式 (様相 mode) が存在論的な様相転移 (mode transition) を経て現象的意識が生起 (occasion) するという仮説に基づく。生起する存在は生起の瞬間を含む先行事象に還元不可能であり、したがって志向的情報の担い手 (medium) としての現象的意識は独我論的なものである。しかし、志向的情報の内容 (contents) は様相の存在論的転移に対し不変であり、したがって意識の生起モデルでは生起する意識の内容は独我論的ではなく志向的なものと捉える。

意識の生起モデルによれば、現象的意識は脳状態などの物理的出来事を引き起こさない。これは人が日常生活で感じる「私が意識して思考し行動した結果、目的を果たした」などの素朴心理学的な感覚に反するように思われるかもしれない。また脳状態に効力を及ぼさない現象的意識が存在することにはどのような意味があるのか。今回の報告では、意識の生起モデルの帰結に伴うこれらの問題について検証する。

(1) 日常生活で使われる“意識”という言葉は、脳神経系における行為者因果 (actor causality) 的な思考様式を構成する認識論的なマクロ概念であり、人に現象として現れる“意識”、すなわち現象的意識と混同すべきではない。

行為者因果性は、Davidson によれば行為者の意図に基づく因果性であり、意図は行為を振り返った後の再記述である。この行為後の再記述という哲学的な考察は、認知心理学における後付け再構成 (post diction)、すなわち文脈的 (陳述的、エピソード的) な記憶の内容が認識的自己概念 (epistemic self) を主体者とするように後付けで再構成的に編集されるという実証的事実と整合する。更に、近年の脳神経科学の実証実験からは、文脈的な記憶のあるものは神経アセンブリ (cell assembly) としてエングラム (engram) されることが知られている。この事実からは、認識的自己概念や心的態度 (欲求や信念、意図など)、あるいは日常生活で使われる“意識”のような認識論的なマクロ概念が物理的にエン

グラム (engram) されていることが強く示唆され、これらのマクロ概念が後付け再構成を経て、行為者の意図に基づく因果的思考を形成するものと考えられる。

行為者因果的な思考様式は色の知覚と似て、ある種の錯覚 (illusion) だが、人はその思考様式に思考によってアクセスすることが不可能である。したがって行為者因果に基づく素朴心理学的な感覚、およびその感覚を前提にした倫理的原理は人にとって真正 (authentic) なものと考えべきであり、それは現象的意識が物理的出来事を引き起こさないという本研究の主張と両立する。

(2) 意識の生起モデルによれば、人の思考と行為は、感情 (喜怒哀楽) にかかわる神経基盤を含めて脳神経系の働きで十全に尽くされる。この脳神経系の働きの一部が感覚質 (qualia) あるいは表象 (representation) という表現形式 (様相) に変容して意識として現れる (現象する) に過ぎない。したがって意識は動物学的、あるいは進化論的には必然性がないもののように思われる。

必然性のないものの存在は可能だが、“私”にとって必然性がない現象的意識が生起することにはどのような意味があるのか。この存在論的な問いは、世界についての志向的情報を形成し利用する物理的存在である認識主体 (認識的自己 epistemic self) と、様相転移によって変容した情報を受動的に受け取る意識主体 (意識が現れる主体、あるいは現象的自己 phenomenal self) の関係性に帰着すると考えられる。すなわち両者を弁証法的に (存在論的に上位の枠組みで) 調停する立場に立てば、意識は脳機能と共に一つの実体である“私”を構成する要素としての役割を果たす。

しかし意識が必然的でなければ、意識主体は存在しないことが思考可能 (conceivable) であり、したがって Chalmers の思考可能性論証によれば意識は物理的なものではない。つまり意識は偶有的ではあっても、物質的な脳およびその機能とは区別される非物質的な存在である。このような非物質的な意識の存在は、認識主体にではなく、意識が現れる主体 (現象的自己) にとってのみ意味を持つ。

以上の議論を Dennett のカルテジアン劇場に倣い認識劇場というメタファーで例えれば、「私とは世界を題材にして自ら脚本・監督・主演する映画を、自らが所有する認識劇場 (Epistemic Theater) で鑑賞する観客のひとりである」と言ってよい。このメタファーでは、観客がストーリーに影響を及ぼすことはなく、したがって Dennett が主張する論理的な無限後退に陥ることがない。また、映画の製作 (物理的な過程) と、それを鑑賞すること (意識に現れること) には必然性がないが、観客にとっては鑑賞することに全ての意味がある。

以上

文献

- Chalmers, D. J. *The character of consciousness*. Oxford University Press (2010)
- Dainton, B. *The phenomenal self*. Oxford University Press (2008)
- Davidson, D. H. Actions, reasons, and causes. *Journal of Philosophy*, 60 (1963)
- Dennett, D. *Brainstorms: philosophical essays on mind and psychology*. MIT Press (1981)
- Kitamura, T, et. al. Engrams and circuits crucial for systems consolidation of a memory
Science 07 Apr. Vol. 356, Issue 6333, pp. 73-78 (2017)
- Shimojo, S. Postdiction: its implications on visual awareness, hindsight, and sense of agency. *Front Psychol.* 2014 ;5:196. Published online 2014 Mar 31.